

哲学とアートのための12の対話——『現代』を問う

第8回：言葉では解決できないことがある？——弁証法、対話、進化

2023年11月18日（土）14:00 京都芸術センター大広間

【「言葉は無力」とはどういう意味か？】

言葉が無力であることは、誰もが多少とも経験している。文字通り「言語を絶する」現実や経験に遭遇した時である。それはたとえば、奇跡のような芸術体験であったり、人生における重大な転換点であったり、歴史の激変する瞬間であったりする。そうした事柄について誰かが「それってつまりこういうことでしょ」などと説明したりすると、「そんな、軽々しく決めつけないでくれ！」などと私たちは憤ることもある。

アーティストの中には、自分の作品が言葉で解説されたり批評されたりするのを好まない人もいる。褒められるならいいが、思いもよらなかった意味を批評家が読み取ったりすると、こんなやつ何にも分かっていない！と怒り出し、言葉なんかでは言えないから制作してるんだ！と。それはその通りである。言葉とは現実に「取って代わる」ものではない。だが考えてみると、「言葉では言い表せない」「言葉は無力だ」と嘆くというのは、逆に言葉を過信しているともいえる。つまり（本当の）言葉は現実をそのままに表現できるはずなのに、いま自分の目の前にある言葉ではダメだ、と言っているのである。こうした態度の背後には、**どこかに真実の言葉があるはずだ**という暗黙の信仰がある。つまり、言葉なんて無力だと口では言いつつ、私たちは実は自分が思う以上に、言葉に深く深く依存しているのである。

哲学者の中にも、どちらかという言葉を軽蔑する人々がいる。西洋哲学の文脈でいえば、言葉の最大の敵はプラトンだろう。プラトンは詩人でもあり、あんなにたくさん本を書いたくせに？でも彼は若い時は政治家を志し、レスラーでもあった（らしい）。つまり彼は世間知らずの文系青二才ではなく**権力や肉体というリアルな世界からスタートした**。そしてプラトンが軽蔑したのは言葉一般ではなく、書かれた言葉だ。記録された文字はやがて、それが書かれた時の世界が変化すると、その本来の意味を失ってしまう。文字は、記録に役立つと同時に本当の記憶を失わせるもの（**ファルマコン**）だ。それに対して生きた肉体から発せられた話し言葉には、その**本来の意味が現前**していると考えられる。だから哲学は「対話」として実現される。ダイアローグ（dialog）とは、dia（二つの）+logos（言葉）であり、「弁証法」とも翻訳される。

【言葉では言い表せない事柄を言い表す言葉について】

「言葉では言い表せない」というのも一つの言語表現である。けれどもこうした言い方だけではなく、世界や歴史の大きな変化を表現するための用語もある。たとえば「**進化**（evolution）」とか「**革命**（revolution）」といった言葉である。これらはまさに、その本来の意味が失われてしまい、本来の意味とはほとんど真逆のことを示すマジックワードと化してしまった例である。マジックワードというのは、その意味がよく分からないことによって、まるで「言葉では言い表せない」この世界の真理を言い当てているかのように使用される、呪文のような言葉ということである。

ダーウィンの意味の「進化」とは、変異と選択によって生じる生物界の変化である（ダーウィンは「進化」という語をあまり使っていない）。けれども多くの人々が理解する（つまりダーウィンの、ではなくダーウィニズムの）「進化」とは、進歩すること、より高度になること、より複

雑で高機能になること、等々といった特定の価値付けを伴っている。現代人の理解する「進化」という概念の背後には、人間の文明あるいはこの宇宙自体が、何かより高度な存在に向かって進んでゆくかのような、（まったく無根拠な）宗教まがいの信念が隠れているように思われる。進化という言葉の元になっている動詞”evolve”には本来そんな意味はなかった（が、現代英語ではダーウィニズム的な「進化」概念の影響を受けてその意味が変質してしまった）。

「革命」はどうだろうか。「〇〇革命」などと政治的スローガンを広めれば注目されたり、表題に付けると本が売れたりすることからも、この「革命」という言葉が一種の呪文であることが分かる。多く人は、革命とは以前の体制が否定されて全く新しい体制が作られることだと思っている。だがこの意味は、たんに「フランス革命」の影響である（この「革命」は、王様の首を切ってしまうのだから確かにそういう意味の革命である）。だが、それがなぜ”revolution”なのだろうか？ ”revolve”とは回転して元に戻ることである（revolver=回転式拳銃）。

【ヘーゲルの文章は、どう読めばいいのか？】（時間があれば講座の中で少し話します）

【言語：「実在との対応」→ 歴史、物語、行動の道具】

実在を映し出す「鏡」としての精神——それは近代哲学に、総体としての世界について語ることを可能にしてきた。またそれは、西洋にとって外部の異質な文化を通約する貨幣のような役割を演じてもきたのである。「精神」が現実を様々に映し出すと考えるからこそ、われわれはギリシア悲劇やチベット密教の「精神」について語ったり、個別科学や芸術作品の「根底にある哲学」を探求したりすることができるのだ。しかもその際、われわれは異なった時代や文化の生産物の内に、それらの固有の「精神」が初めから実在しているかのように考えてしまうのである。

しかし、もしこの「精神」そのものが、ある特定の文化の、ある特定の時代に発明された観念に過ぎないとしたらどうだろうか。ローティはトマス・クーンやファイヤアーベントの議論を援用しながら次のように考える。哲学という領域においても、一般に「進歩」と呼ばれているものは、未解決の伝統的問題が首尾よく「解決」されることによって生じるのではなく、むしろ伝統的諸観念の誤った、あるいは歪曲された使用を通じて、問題そのものが新しく作り直されることによって生じるのである、と。たとえばデカルトの方法は、スコラ哲学の解決しえなかった問題を「解決」したのではない。それはむしろ、哲学の主題を全く異なったものにすべく、問題そのものを定式化し直したのである。だとすれば、われわれが哲学的思考において直面せざるをえないと思っている問題とは、実はすべての人間にとって普遍的なものでも避けがたいものでもない、ということになる。けれどもいったい、われわれはどうしたらそうした問題の呪縛から逃れることができるのだろうか。

（……中略）実在への接近としての哲学を根底から動機づけているこの衝動を、ローティは「認識論」の衝動と名づけている。しかしここで「認識論」と言われているのは、伝統的な哲学の一分野としてのそれだけではない。ローティによれば、普通はもはや認識論とは呼ばれない、哲学の新しい意匠の中にも、深層の「認識論的」衝動は生きていたのである。例えば、「言語論的転回」以降、哲学者たちの関心は「観念」から「言語」へと移行したが、あらゆる知識の基礎づけのある特権的な領域（言語）の分析を通して遂行しようという言語の哲学の要求は、実は認識論のそれとまったく同型のものなのである。そのことによって、現代の言語の哲学は、かつて認識論的哲学を悩ませていた問題をそっくり引き継いでしまうことになるのだ。深層の「認識論的」要求が生きているかぎり、言語の哲学は伝統的なアポリアの桎梏から逃れることはできない。「実在との対応としての真理」を求める衝動そのものが根絶やしにされないかぎり、単に「言語」が新しい「鏡」の地位に昇格したにすぎないのである。

リチャード・ローティ『哲学の脱構築——プラグマティズムの帰結』（室井尚・吉岡洋・加藤哲弘・浜日出夫・疋茂訳、お茶の水書房、1985年）「解説」より。本書は『プラグマティズムの帰結』として2014年にちくま学芸文庫に収録。